

# 東北大学付属図書館狩野文庫蔵 『物種太郎』 翻刻

(翻刻／網野 可苗)

- 〔外題〕 狐福／物種太郎 (刷題簽)
- 〔内題〕 なし
- 〔柱題〕 ものくさ
- 〔刊写〕 刊
- 〔数量〕 三巻1冊15丁 (3冊を合綴)
- 〔形式〕 縦18cm×横12.9cm
- 〔作者〕 鳥居清経 (画)
- 〔出版〕 鱗形屋版
- 〔序跋〕 なし

## (1オ)

京のたつみにあたつて宇治のさとあり。此所にむかし万福屋徳左衛門といふ町人、家とみさかへけり。ゑよふのうはもり此上なかりしかば、内外のものをくわつけいなるけいをもてあそぶ。伴頭無理平さまく香「かう」をきく事をこのめり。はんの手代太郎兵衛はとかくうゑ木をすきこの「む」なり。たねのはゑる事をこのめり。徳左衛門金銀あかてめつらしき道具をもとむる。此ころ漢「かん」の武帝「ぶてい」の御□□□きのほらのかけ物を金百両にもとむ。

## (1ウ)

徳左衛門金にあかしてさまくの道具をもとむるときいて、山しともばんとうとこしらへ古きむしろを一まい「持参」したれば、もろこし魯「ろ」の哀「あい」公孔子「かうし」をめしつとにも座し玉ふむしろ之とてみせければ、徳左衛門れいのくせかおこりて、あたいにかまはずとゝのへけり。そのゝち又竹つゑのふるきを一本持来り。これは大王狄「てき」を避「さけ」て邠「ひん」をさる射「や」つき玉ふ物之といふ。又これをみてとひつくほとほしくなりて、あるほと金の出てもとめける。

## (2オ)

むり平は主人たわけなればうりてとなれ合て金をわけとる。主おもひの太郎は此事をふかくなげき、御むよふなりといさめけるを、金けんみゝにきらい、太郎はついにいとまを出されしぞげひもなし。むり平今は心のまゝに内の事とりあつかい、主のあね姫おあきへむたいのよこれんぼをしかけ、くときしはいやらしい事。

## (2ウ)

正じき太郎兵衛いとま出され、国もとはしなのゝ国なれば、ざいしよへひきこまばやとて

京にとりうの内、ひごろねんづるいなり山へ七日まふでせしが、年のよわひ廿ばかりのうつくしき女これもまい日さんけいせしに、たがいにあいぼれとなりしが、たつがものをもいわづ、あるひげかうの折からしみ／＼とことのかたり、たがいのこの上はなして、これもいなりの御ひき合と、太郎兵衛かの女をつれてしなのへぞくたりける、ゑにしにのほどにてふしぎなれ。

(3才)

そも／＼いなり大明神と申けるは、荷田「かだ」明神の荷「か」をとり倉稲魂「うかのみたま」の稲「い」をとりて稲荷大明神とあがめ奉る御神たい三社なれとも、これに四の明神と田中の社を一合て、いなり五社大明神と申「来」る。すべて衣食「いしよく」の祖神にして蒼「そう」せいあんいつの灵社「れいしや」之。御つかわしめの白狐は神通「じんつう」自「在」。「じさい」をゑて、しん／＼の輩には百福をあたへ、子孫永／＼まで昌栄「しうき」になしたまふ。

(3ウ)

またある時、古道具やふるきちやわん一ツ持来り。これは舜「しゆん」のつねにしよくし玉ふわんなりば、しめの二品は国の代のもの之。此わんは千年のよもさきものにてためしなき道具といへば、やるせもなくほしくなり、田地いへやしきにかへてと／＼のへければ、ちやんが□又なくこれよりひんぼうせり。徳左衛門いもとかる此事をくらうにせしが、そうたんあいての太郎兵衛はなし、女心のくよ／＼と徳左衛門のあほうをきのどくかりけり。

(4才)

悪手代無理平は道具やとあいけんにて、おもふまゝに金をわけとり、此うへは主人のむすめおあきとふうふになり、此あとをしてこまさんといやましにむたいにいろことをこじつけけるは、爰よりみるにしのひづ、無理平をとらへ、こがいの時とらまつふるわんほうをとりかしみせてにつくはやつめがと、さん／＼ちやうちやくして、あるいははらたちいかつて、その心ざ□のし□とぞいかりる。

(4ウ)

無理平そのころ、昨今さみせんもしなんするはわたつといふ女にうちこみ、金をつかいてかよいけるか、お秋のかほやまされけん女ぼうにせんとくどきしが、おもひのほかおぼこのせつかんにあい、むねんだぐひなく主人の大せつにせし小道具又は名香きやうのたぐひまでのこらずぬすみ出すと…をおよつ事□…られとる…たてられしところ(※汚損にて判読不能)

(5才)

なんのぞうさもなくきりたおし、ゆきが…(※汚損にて判読不能)女あける徳左衛門□□次第、あねのおあきいもののおふゆおはこのしがいにとりつき、ひたんのなみたにむせばるゝ。あたりに一通「つう」おちてあり。よんでみれば□此あいだのやうすなし、もはや此所のすまいなりがたく候はん、まみつうらをつれて御たちのき候べく候かしこ。むり平ま

いるいわよりとあり、さてはいわといふ女てがゝりとする。

(5ウ)

万福屋の家らんぼうせしかば万よりぶんさんして、かざいどうぐをことにうちとりける。その時人く申は、いかにさまくたちのかれよといへは、何にちうにもなきかほつきにて、○金銀はもとよりなしかざいには目もかけず○孔「かう」子の古筵「ふるむしろ」のせたらをいをつき、舜の大王の竹つゑをつき、舜のかけはんもちて、人の門くにたちて物をこいける。さてそのみの心からとはいくながら、せひもなきありさまかな。かし方く徳左衛門どの。

(6オ)

無利平其のばちにてぬすみためしのかわとあきないせしに、いなかとてばかにもならず、金銀ほうがはいをまきしやうにみなになり、やうくのこるものとは、たきものくたぐいきやうばかり之。そのむかしはいなかにても哥をよみ詩をつくり香をきくものもありとみへたり。無利平みのく国のかみのしゆくばつれにて、てんほてんねんつぶてにきやらもねだんやすくみれける。

(6ウ)

正じき太郎平はもと百姓「ひやくせう」なれど、文才「もんさい」ありて五言「ごこん」七言「しちこん」の詩と賦「ふ」しけり。又草木をうへてその種「たね」をとりて人にもほどこしけるゆへ、村中たむらにても太郎兵衛を○物種「ものくさ」太郎殿くといくける。のちは兵衛をのぞき、物種「ものくさ」太郎くといふ。種「くさ」はたねといふ字之。宇治左衛門女ぼうをむかへ来り、ざいしよへひつこみふう中むつましく、今ははや太郎松とて三才の男子をもふけめうとしてえ蝶よ花よとあいす。

(7オ)

しかるに女ほうおきく、うつくしき事いなかはもとより、京にもまれなるぼつとりものなり。ある時女房が火をふくかほをみて詩をつくる。

吹火動朱唇添薪玉「ひおふいてしゆせんうごきたき」をうへてぎよく「腕斜遙見」をんないるかはるかに「煙裏面」多んりのおもてをみれば「都似霧中花」すへはみやこのはなに「たり」

いとくさへ火をふくくちもとはみにくきものなるに、此おきくはよくくうつくしき女とみへたり。すべて女は何とぞやうげんうるはしくむまれつきたきものなり。

(7ウ)

そのとなり丹蔵といふものく女ほうおたふくづら、此事をきいてうら山しくおもひ、おつとにむかひて、われも火をふくべし詩をつくり玉へといふ。おつとうなつき女ぼうの火をふくづらを見て、ふさくしくおもひながら詩をつくる。

吹レ火青「ひをふいてせい」唇添薪「しんうごきたき」をそへて「黒腕斜遙見」こくわんなくめみるはるかに「煙裏面殆似鳩」けむりのおもてをみればあたかもくはんだ「槃茶」にくた

り「くはんだとは鬼の事なり  
となりの女ぼうがうつくしきをねたみにくみける。

(8才)

さても徳左衛門のむすめ兩人、おぼこのかたきのがゞりをもとめんとて、そこもしらぬしなのゝ国村の名ばかりおぼへて、太郎兵衛をたづねきたる。いつくをそれともしらねとも所のものにたつねけるに、これも神の御めぐみかや、あるものゝおしへしは物くさ太郎の所はどこそことたつね玉へとおしゆる。兩人これにちからを得て、物くさゝとたづぬる。

(8ウ)

お秋おふゆやうゝと太良兵衛方へたつねつき、さきだつものはなみだなり。無利平おばごをうつてたちのきし事、せんごあとさきはなしける。物くさもやうすをきゝ、これはゝとばかりありまづしばらく此所をとゞまり玉ひて、きうそくし玉へとて、又よきも□くかいほうするあさ□もと□これにちからをえて何事もたのまる。さて女ほうに人ゝをひきあわせ申せば、しあらく小くびをかたむけ

(9才)

おきく女ながらもはつめいにて易堂「多きどう」につうじ、ぼくせいをかんがへ、ねらう心は陰「いん」之、ねらはるゝ心は陽「やう」なり。これはたやすくはほんもうとげらるゝ事かたし、しかし御ふたりながらおもてをかくしねらひ玉へ。敵のほうがかはこれより西南のかたにあたれりとあり。まさにうらのふこれによつて、二人の女中ともそうすがたにやつし、みのゝ国あふみのかたへとこゝろざして出ゆきける。

(9ウ)

丹蔵が女ほうみにくきかほつきなるくせに、さいはぢけものにて、おつとが折ふし香をたくそばへゆきみるよし少しはきゝしり、又いつぞやのがみにてとゝのへ来りしめい香とやらを、何とぞ一たきたいてみたくおもひ、あるときつまのるすにかのめいかうをまんまとぬすみ、少したきければ、てしそのかほり四方にくんじ、あたりほとりまでにはひわたる。

(10才)

折ふしにはとかなきける物くさ太郎ものうへ出てるすなりしかは、女ぼうわが子にちをふくめひるねしていたりしが、にはとりのこゑにおとろきめいかうのかほりはなに入て、はつとおとろき、おもはずしらずやかんのおもてをあらはし、はづかしくやおもひけん、わが子をつれていづちへかゆきけん。

(10ウ)

物くさ内へかへしてみしに妻子なし。かきりなくなしみしそのよのゆめにおききたつて、我すかたをあらはして、しばしもおりかたし、御身は兄弟のうしろみしてかたきをうち玉ふよふにし玉へ、かけながら我もちかいをそへまいらせん、その時こそ太郎松もまい

らすべしと、よあけなばきつねはあなでくだかけのまたきになきてせなをやりつゝ、なこりおしけに一首の古哥をせうしにのこして、なく／＼わかれしとゆめにみへて、物ぐさ太郎よろこひさらはとてしたくして、兄弟のあとをしたい出てゆく。

(11才)

兄弟の娘竹をふきてとあるいへに物をこふ。此内にことをひきていたる女のしいたるが、これをけふの布鎚「いて」にてかへり玉へとい□ければ

〽ことゝいははあるじながらも多てしかなねはしらねどもひきこゝろみん

とよみければかのめしいの女中、下女に申付やさしくもそのよみ玉ふものかな、こよひの御やどまいらせんとて、二人の女こむそをとめける。

(11ウ)

あねのお秋さとくも此女中いかさまよしありげなりとみて、御名はいかにととへは、いわこすところことふ。されはいかなる御事にてかくはしのひ玉ふにやといふたればとよ、我はもと糸竹のしなんせしものなるが、恋ゆへにその所をたちのきかなたこたなとさまよいし中行がんにてかく目しいさむろふと、こしかた物かたりしてよもふけたれり。われ／＼はおやにわかれてかく女なからこもを□下なり候とことふ。

(12才)

いもとのおゆふ下女をすかして此やのあるじの御かたはととへは、さればとよ此やのあるじ殿もしさいありて、御身のごとくとむそくに身をやつして、二三日あるひは五六日づゝたびがけにあるき玉ふとくわしくかたる。あねいもと此やのあるじのありさまかたきのかゝりにわりふをあわせたることくなれば、何事も心にこめさあらぬていにて出てゆく。

(12ウ)

お秋ふしぎに物くさにめぐり合、いよ／＼ちからつよくおもひそれよりみなみの国のかかたへ三人つれにてたちこえしが、お秋なをも物ぐさをたのもしくせんため、いつしか恋となりけり。物くさも今はひとつ身のついにそうだんいてきて、かいらうのかたらいをなせり。これより物ぐさ太郎もいよ／＼みにしみてちからとなり、ついにしうのかたき無理平にめぐりあいてほんもうとける。

(13才)

無理平もこむそうとなりて虚空坊「こくうぼう」といふて身をしのふ。むかふよりきたりしこむそうはたしかに女之とみて、そばにたちよりしか／＼の事いふて道つれになし、同じくしゆ行せんとさきへ四五丁もゆきけるが、もしやかのやつではないかとはおもへど、無理平がかほはみしらずにいほどにあしらふ内、かのこむそう人めなければ、むたひに恋をかなへんととりつく。

(13ウ)

無理平三人のこむそうをみて、なむさんほうみつけられてはかなわじと、あしにまかせて

にげのびんとするに、いんぐわな事にやかつけすじつまり津の国つゝみが瀧「たき」のほとりにておつつめられ、ついにさしころされしてんめいのほどこそこちよし。兄弟のむすめおもひかけなくおばのかたきをやす／＼とうちてほんもうとくる。これもひとへにこむそうにすかたちせし：ならん：おきくふと□：（※汚損にて判読不能）

（14才）

薦僧「こもそう」とは修行者「しゆきやうしや」之。虚無僧「こもそう」共云。之尺八の譜「ふ」にこもそうの手二ツ〇臨門流「りんもながし」〇虚冷「これい」〇又「こもそう」の事を暮露「ぼろ」の僧「そう」とも〇馬ひぢりともいふよし〇職人「しよく」づくしの哥合二曰四十六番歌に左暮露「ほろ」の月の前に

ゝ法の月ひろくすましてむさしのお：露の□いほかな

ゝいとふなよかよふ心のむまひしか人のきくべきあのおともなし

（14ウ）

人／＼よろこびしなのゝ国たちかへらんとする道にてこつじきあり。よく／＼みればいにしへの主人おや人徳左衛門之。これは／＼とばかりにてよろこびともなふ所へ、あたりの薄「すゝき」そよめき、せんさい／＼われはこれ稲「い」荷「なり」の本社命婦の神なり。なんじ心すなほにして主に忠

（15才）

あり。さるによつて今かりに夫婦となりて一子をもふくる。かならず此子そうめいにしてふくとくあらん。又あねのお秋を妻となし此子をいよ／＼あわれむべし。かつ又いもとおふゆが事もやがてにやわしきゑんたんをさづくへし。なを／＼此うへまもらんとて、太郎松をものぐさにさづけ、紫雲「しうん」にうちのり落さり玉ふ。みな／＼きいのおもひをなし、それよりいそぎしなのゝ国へぞくたりける。まことに主には忠をつくすべき事なるかな。

（15ウ）

此事篠田妻「しのだつま」に似「に」たる事にて何とやらうたがわしけれど、さふあらず。その所は信「しん」州「しう」安曇郡「あつみこほり」穂高「ほたか」組「くみ」重柳「しげやなき」村物ぐさ太郎と申よし、次第に家富「とみ」さかへ高持の老百姓となるよしみへたり。その子八旬ばかりにて今に存命「ぞんめい」なるよし。しかるに此子孫「そん」の手はみな丸しと、菊岡占「きくおかせん」涼「りやう」が本朝俗諺志にみへたり。